

「二十六人の男と一人の少女」(ゴリキー)

黴臭い地下のパン工場に閉込められて、「生きた機械」よろしく二六時中粉を練つて巻パンや堅パンを拵へる二十六人の男達がゐた。苦しい労働ゆゑに「半分死んでゐる」様な連中で、同じ敷地内の白パン工場の労働者も裁縫工場の女工も「囚人」と呼んで蔑んでゐるが、十六歳の可愛らしい女工ターニャだけは別だった。彼女は毎朝地下を訪れ、「囚人さん、パンおくれ」と美しく優しい聲で叫ぶのだ。男達は彼女に嬉しげな視線を向け、「ふしだらな冗談一つ」云はなかつた。男達は「まだやはり人間だった」から、何かしら一つでも「ほんたうに美しいもの」、「尊敬の的となるやうなもの」を持ちたい、「なにものかを愛して」ゐたいと本気で願つたのだ。かくてターニャは「二十六人の愛の對象」として、「神聖にして犯すべからざる」存在となつたのである。

そんな或日、白パン工場に色男の新顔が加はり、地下にやつて来て氣さくに男達と話し込む

が、彼の話題は常に女に持てる話、女をたらし込む話である。男達はターニャの事が心配になる。やがてまた新顔が顔を出し、得々^{とくとく}として女工達に持てた話をする。男達の一人が反撥^{はんぱつ}して、他の女工はともかく、ターニャだけは「難しからうぜ」、と咄嗟^{とつさ}に口走ると、新顔は怒つて、二週間でもものにして見せると豪語する。男達は軽卒な發言を後悔するが、同時に激しく興奮もする。「偶像の純潔さをためすこのテスト」は「大きなばくち」で偶像破壊の結果にもなりかねないと強く懸念する一方、「われらの女神の強さ」を何としても試してみたいと切望もしたからだ。

とどの詰りターニャは新顔のものとなる。現場を捉へた男達は彼女を取り圍んで罵詈雑言^{ぼりざふごん}を浴びせる。お前は俺達を裏切つたのだ、どんなに苦しめても苦しめ足りない。少女は身體を震はせて立ち盡す。誰かがその上衣の袖を掴^{つか}んだ。するとターニャは兩眼をきらりと光らせ、落着いた聲で、「あーあ、あんたたちはみんな氣の毒に、牢屋へ入つてゐるやうなもんね」、「いけない奴ばつかり」と吐き捨てて立ち去つた。男達は冷たい雨の降る空の下に立ち盡し、それから地下に戻つて行つた。ターニャは二度と再び現れなかつた。

名作「どん底」に於て「慰めの嘘」と「救ひの眞實」との葛藤を描いた、如何にもゴースリ

キーらしい作品である。或時、男達の一人がターニャについて、「あの娘ツ子をあんまりたてまつりすぎるぜ」と云ふや、そいつを皆で無理矢理黙らせる場面がある。「嘘」かもしれぬと何處かで思ひつつも、皆、「慰めの嘘」に浸つてゐたいのだ。しかし、假令「大きなばくち」であつても、自分達の「愛の對象」が眞に「救ひ」を齎す「眞實」か否かを見極めたい、と冀ふのも人間である。「どん底」に出るサーチンは、人間は「胃の腑よか高尚だあ！」（神西清譯）と叫ぶが、如何に「どん底」の生活をしてゐても、人間は「胃の腑」だけの存在でも、「生きた機械」でもない。「ほんたうに美しいもの」、「尊敬の的となるもの」が欲しいのであり、亦さうあつてこそその人間なのだが、それは飽食暖衣の今、殆どの日本人が忘れてゐる事である。

ちと唐突だが、昨今、私は木下杢太郎の戦時中の文章に強い感銘を受けてゐる。鷗外に愛され、「小鷗外」とも稱せられた、この稀有なる文學者にして醫學者は、空襲下の東京に踏み留まつて、歐米といふ全く異質な文化の「大魔軍」に「叡智と道義と教養」を以て立ち向ふ術を知らぬ祖國の爲體に齒齧みしつ、理想の君子人の生き方を眞摯に追ひ求めた。杢太郎も今は殆ど忘れられてゐる。

（上田進譯、「チエルカッシ他一篇」、岩波文庫）